

# テクストの時制分布と連関の形

—テクスト言語学の方法—<sup>1)</sup>

西 村 淳 子

## I. 序

動詞時制は、フランス語学においても、また、一般言語学においても、もっとも研究されてきたテーマの一つである。それらの研究の中には、ある時制の諸用法を経験的に枚挙するものや、諸用法に共通する価値を追求しようとするものなど様々なものがあるが、その多くは、一つの時制（すなわち記号）には一つの「本質的価値」と多様な用法があることを前提にし、もっとも普遍的な価値は何かを問うものである。例えば、「直説法半過去の価値はなにか？」「その用法は？」「多くの可能性のうち本質的な価値はどれか」というような形の問い合わせられてきたのである。関心がもっぱら記号中心であったために、考察の対象も文脈から切り離された文であることが多く、状況や文脈の中で使用された言葉が対象になることは少なかった。

このような記号中心の探求とは異なり、テクストに生起する時制の連絡的関係に注目したのは、テクスト言語学の提唱者、H. ヴァインリヒであ

1) 本稿は、2003年度武藏大学特別研究員としてパリ滞在中に執筆したものである。研究の機会を与えてくださった武藏大学、不在中の仕事を快く引き受けてくださった人文学部の同僚、そして、客員研究員として受け入れてくださったフランス国立研究所 UMR8606、および、滞在中絶えず助言と励ましを与えてくださった元パリ第5大学教授 F. François 教授と当研究所所長の C. Hudelot 教授に心から感謝の意を表したい。

る。ヴァインリヒは、著書『時制論』<sup>2)</sup>において、三種類の時制の対立が物語りテクストの内容構成に貢献していると主張した。その対立とは、1) 発話態度（語り時制／説明時制）、2) 発話の方向（回顧時制／予見時制）、3) 浮き彫り（前景／背景）である。その後、テクストにおける時制の価値の研究も重ねられ、ヴァインリヒの主張は、一部が定説となる一方で<sup>3)</sup>、単純過ぎるとか、発展性のない「閉じた研究」であるという批判もなされた<sup>4)</sup>。批判の多くは本質的なものではないが、確かにその後の研究には、時制という記号（あるいは、記号の対立）の研究に逆戻りしたものが多く、複雑なテクスト構成を明らかにする方法の洗練にはつながっていない。筆者は、その理由の一つが、研究の基礎となる時制分布のデータが網羅的に適切な形で明示されていないことにあると考える。実際、どのようにすれば膨大なテクストの時制分布を簡潔に呈示することができるのであろうか。往々にして研究対象のテクストと同じくらい、あるいはテクスト以上に複雑で読み取りにくいものになりかねない。しかし、判断の基礎となる時制分布の網羅的データが調査者だけのものである限り、都合のいいデータだけを示すこともできる。そこで、多くの研究が重ねられても、テクストの全体像の見えない、発展性のない理論という批判を招くのである。

このような問題を解消するために、本稿は、まず第一にテクストの時制分布を視覚的に明示する手続きを提案する。これをどのように解釈しようと、基礎データの共有は理論の客觀性を確保するための最も重要な手続きだからである。

- 
- 2) WEINRICH, H.: *Tempus, Besprochene und erzählte Welt*, W. Kohlhammer GmbH., 1971.  
『時制論』、脇阪豊、大瀧敏夫、竹島俊之、原野昇訳、紀伊國屋書店、1982年。  
*Le Temps*, traduit par Michèle LACOSTE, Seuil, Paris, 1973.
- 3) この三種類の時制対立のうち、「浮き彫り」（前景／背景）という対立がもっとも受け入れられている。D. LEEMAN-BOUIX の *Grammaire du verbe français*, 2002や C. TOURATIER: *Le système verbal français*, 1996, D. MAINGUENEAU の *Approche de l'énonciation en linguistique française*, 1981など比較的教育的な著書にも取り入れられている。また、MAINGUENEAU (1981) では、発話態度（語り／説明）の対立も採用されている。
- 4) REBOUL, A., J. MOESCHLER: *Pragmatique du discours*, 1988, pp. 99-121.

本稿の第二の目的は、この時制分布のデータを使って、時制とその他の要素がテクストにおいて相互に関係しながら様々な連関を作り上げていく様子を考察することにある。実際、諸時制が作り出すテクストの内容構成は、ヴァインリヒの指摘した三つの対立より遙かに複雑である。また、時制は時制同士の対立によって一定の効果を発揮するだけではなく、他の要素、例えば、動詞の語彙的な意味や代名詞、時を表す副詞表現などと相互に関係し、個々のテクストに固有の価値を生じるのである。このように複雑なテクストの内容構成も、上のデータを利用することにより、きめ細かく正確に考察することができるようになるはずである。

### テクストとは何か？

分析を始める前に、「テクスト」という語を定義しておく必要がある。M.A.K. ハリデーと R. ハッサンはテクストを意味的に統一的構成をもった言葉の単位と考えた<sup>5)</sup>。また、ヴァインリヒは、この概念を研究に先立つ「枠づけの定義」として、形式的な定義をした<sup>6)</sup>。我々の定義もまたあくまで操作的なもので緩やかであるが、このどちらとも異なる。

何よりもまず、テクストは使用された言葉である。ソシュールの言語体系「ラング」／使用された言葉「パロール」という概念を用いるなら、パロールに近いが、この対立が普遍性／個別性という両極の対立であると考えられているのに対し、現在では多くの言語学者が言語体系と言語使用には相互に有機的な関係があり、言語使用が単なる個別的な体系の実現であるとは考えていない。そこで、パロールに代わって「談話」ディスクールという用語が生み出された。この意味でテクストもまた談話の一種である。

5) 「テクスト (TEXT) という語は、言語学では、何であれ統一された全体を構成している一節を指すために使用されている。／...／テクストは、意味的 (SEMANTIC) な単位とみなすのが最も妥当である。つまり、形式の単位ではなく、意味の単位と見るのである。」 M.A.K. ハリディ、R. ハッサン：『テクストはどのように構成されるか』、1997, pp. 1-2.

6) 「つまり、テクストとは伝達の顕著な中断と中断の間の、意味をもつ（すなわち関連ある一貫した）言語記号の連鎖であるといえる。」 ヴァインリヒ、*op. cit.* p. 6.

テクストという語の中には、ある種の一貫性、秩序、連関の存在が含意されている。しかし、重要なことは、この一貫性が対象そのものに内在する性質ではないということである。ソシュールは特定の話者や聞き手を捨象したところに客観的な科学の対象を見いだしたのであるが、我々はこれらの発話主体、受容主体をも含めてはじめてテクストを定義することができると言える。つまり、受容者がそこに一定の秩序、連関を見いだすことができたとき初めてテクストが存在するといえるのである。その秩序は、音韻的なものでも、意味的、語用論的なものでも、また、異なるレベルに跨るものでもよい。しかし、何をテクストと認識するかは受容者によって異なる。

テクストのもう一つの重要な特徴は、本来の発話状況を離れて機能することである。談話は、本来の発話の状況を離れて、第三の受容者に与えられたときに「テクスト」となる。テクスト自体は、もちろん特定の話者が特定の状況で行った発話行為の産物であるが、第三の受容者にとって話者や発話の状況は所与のものではなく、談話の方から推測しなければならない。通常の言語行為では、話し手、聞き手の双方にとって、対話の状況は所与のものであり、これに基づいて談話の内容が解釈される。しかし、テクストの場合は、言葉の方から発話の状況を想像することになるのである。この解釈作用の逆転を F. フランソワは古い新聞を例に挙げて説明している。どこからか見つかった古い新聞は、もはや状況に支えられて理解されるのではなく、新聞の方がその書かれた状況を想像させることになる<sup>7)</sup>。

言語研究において、言語資料はほとんどの場合文字テクストの形で呈示される。その場合、読者はまさにテクスト受容者として本来の発話状況を想像することになる。研究者自身がたとえ発話状況について直接的な知識をもっていたとしても、読者はそれを共有していない。言語解釈に関し

7) F. FRANÇOIS, "Linguistique de la langue et dialogue avec les textes, un point de vue", *La Linguistique*, vol. 39. fasc. 2/2003, p. 67.

て研究者と読者には共有されていない前提が働くことになる。しかし、研究者にもテクストという形で与えられた言葉であれば、研究者と読者とは同等の条件で言葉に向かい合うことになる。このような意味で、テクスト研究は研究者と読者が対等な立場に立つ言語研究の角度であるといえる。

### ヨーロッパ 言語資料

ここで分析の例に用いたのは、A. ドーデ Daudet の小説『風車小屋便り』*Lettres de mon moulin* の中の一話、「アルルの女」L'Arlésienne である。分析の対象がこの作品でなければならない積極的な理由はないが、消極的には、比較的短く構成度の高い文学作品だからである。文学作品は、発話の状況（作品がつくられた状況）を離れても機能することを予想して作られた談話である。つまり、テクストという形で存在し、機能するために生まれた談話である。しかし、テクスト言語学の対象は必ずしも文学作品である必要はない。むしろ、どのようなジャンルのテクストがどのような構成をもっているか、このこと自体が考察の対象である。ここでは、方法の呈示が第一の目的であるために、このように典型的なテクストから分析を始めることがある。

## II. 分析の手順

分析は次の手順で行う。まず、テクストに生起する動詞時制の分布を視覚化する。そして、これとテクストの内容構成とを比較しながら、時制が内容構成、連関にどのように貢献しているかを調べる。その際に、時制が他の要素とどのように関係するかを考察する。とりわけ、時制が潜在的な多くの可能性の中から一つの価値を実現するために役立った他の要素、例えば、人称代名詞や時を表す副詞句などとの親和性や干渉を検討する。

1. 基礎データの作成：時制分布の視覚化

1. 1. 動詞時制の同定

1. 2. 映示

A. リスト：取り出した時制を出現順に記述し、リストを作成する。

B. 図式：使用時制の推移を把握し易いように図式化する。

2. データの解釈：時制分布の解釈

2. 1. テクストの内容構成のグローバルな把握

2. 2. 時制の分布と内容構成の比較

2. 3. 時制と他の要素との相互作用の考察

それでは、具体的な分析に取りかかろう。

### III. 基礎データの作成：時制分布の視覚化

#### 1. 動詞時制の同定

テクストの中から、活用する動詞を取り出し、その時制を同定する。テクストの動詞に下線を引き、出現順に番号を付ける。そして、各動詞のテクスト中の時制を同定する。大量の時制分析を容易にするために、時制を便宜的にコード化し、番号で表す。このコード番号は、連続量を表すのではなく、時制相互の識別を行うためだけの記号に過ぎない。各時制に対応する記号は以下のとおりである。

図1 動詞時制コード表

コード番号	時制名	コード番号	時制名	コード番号	時制名
90	命令法	130	直説法前未来	170	直説法半過去
100	直説法複合過去	140	条件法現在	180	直説法単純過去
110	直説法現在	150	条件法過去	190	直説法前過去
120	直説法単純未来	160	直説法大過去	200	接続法

Pour aller au village, en descendant de mon moulin, on passe<sup>1</sup> devant un mas bâti près de la route au fond d'une grande cour plantée de micocouliers. C'est<sup>2</sup> la vraie maison du ménager de Provence, avec ses tuiles rouges, sa large façade brune irrégulièrement percée, puis tout en haut la girouette du grenier, la poulie pour hisser les meules et quelques touffes de foin brun qui dépassent<sup>3</sup>..

Pourquoi cette maison m'avait-elle frappé<sup>4</sup>? Pourquoi ce portail fermé me serrait<sup>5</sup>-il le cœur? Je n'aurais pas pu<sup>6</sup> le dire, et pourtant ce logis me faisait<sup>7</sup> froid. Il y avait<sup>8</sup> trop de silence autour... Quand on passait<sup>9</sup>, les chiens n'aboyaient<sup>10</sup> pas, les pintades s'enfuyaient<sup>11</sup> sans crier... À l'intérieur pas une voix! Rien, pas même un grelot de mule... Sans les rideaux blancs des fenêtres et la fumée qui montait<sup>12</sup> des toits, on aurait cru<sup>13</sup> l'endroit inhabité.<sup>8)</sup>

風車小屋を下りて村へ行くには、えのきを植えた大きな庭の奥にあって、道の近くに建っている「農家」の前を通る。赤がわらで屋根をふき、くり色の広い外壁には不規則に窓が開き、そして一番上に納屋の風見があり、刈草を巻き上げるのに使う滑車が見え、まぐさの茶色の束が五つ六つはみ出していて、いかにもプロヴァンスの地主らしい...どうしてこの家が私の心をうつのか、どうしてこの閉ざされた門が私の胸を痛ませるのか、それは言葉には表せないが、この家を見るとぞっとするのだった。周囲があまりにも静かだ...人が通っても犬はほえず、こもんどりは鳴きもせずに飛び去る...家の中は声一つしない! らばの鈴さえも聞こえない...窓の白い窓掛と、屋根から上がる煙とがなかつたら、だれも住んでいないと思われただろう。<sup>9)</sup>

8) A. DAUDET: *Lettres de mon Moulin*, Fasquelle, 1973, pp. 61-62. 言語資料（コーパス）にしたテクストはすべて本書からの引用である。全体を本稿末に挙げたので、以下の引用では、繰り返し出典を示すことはしない。しかし、動詞の番号でテクスト全体における位置が推測できるはずである。

9) ドーデー作、桜田佐訳『風車小屋だより』, p. 46, 以下、このテクストに関してはすべて桜田訳を用いたので、以下の引用では、ページ数のみを記す。

図2 テクスト中の出現順動詞番号とその時制コード

出現順番号	時制コード	出現順番号	時制コード	出現順番号	時制コード
1	110	6	150	11	170
2	110	7	170	12	170
3	110	8	170	13	150
4	160	9	170		
5	170	10	170		

動詞を取り出す際にどこまでを考慮の対象にするかに関して絶対的基準があるわけではない。時制は、比較的閉じた体系を成しているが、不定法、分詞、近接未来、近接過去その他の境界的な現象も存在する。したがって、考慮の対象は、分析の目的とテクストの性質に従って決める。重要なことは、基準が一貫していることである。本稿では、テクストの全体像を把握するために、下のような区別は当面考慮の対象としない。

- 不定法、分詞は、述辞を現動化しない形であり、名詞、形容詞など他の品詞との境界も問題になるので、ここでは考慮の対象としない。
- 近接未来、近接過去などの半ば文法的に時制化された動詞迂言法の扱いであるが、ここでは、これらを時制体系の一部とはみなしていない。その理由は、まず、どこから語彙的な意味でどこから文法的な要素として扱われるかという境界がはっきりしないこと、そして、*je vais sortir/j'allais sortir* のように迂言法の語彙自身が、活用語尾の時制と重複するからである。
- 接続法の4時制、すなわち、接続法現在、過去、半過去、大過去は、頻度の低さと、本稿の問題との関わりの薄さを考慮して、ここでは同一カテゴリ「接続法」として扱う。

## 2. 呈示

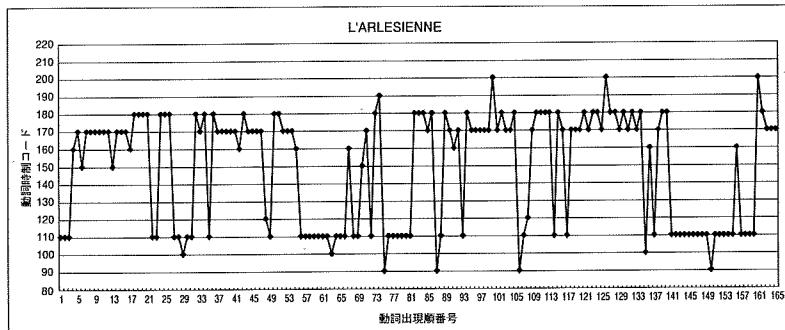
- A. リスト：取り出した時制を出現順に記述し、リストを作成する。

図3 アルルの女 時制分布リスト 抜粋

番号	テクスト抜粋	コード	時制
1	on passe devant un mas	110	現在
2	C'est la vraie maison du ménager de Provence	110	現在
3	quelques touffes de foin brun qui dépassent	110	現在
4	cette maison m'avait-elle frappé	160	大過去
5	ce portail fermé me serrait-il le coeur?	170	半過去
6	je n'aurais pas pu le dire	150	条件法過去
7	ce logis me faisait froid	170	半過去
8	il y avait trop de silence autour	170	半過去
9	Quand on passait	170	半過去
10	les chiens n'aboyaient pas	170	半過去
11	les pintades s'envuyaient sans crier	170	半過去
12	la fumée qui montait des toits,	170	半過去
13	on aurait cru l'endroit inhabité	150	条件法過去

B. 図式化：次に、全体の推移を容易に把握できるよう、上のリストのテクスト部分を省略し、以下のような図に直す。

図4 「アルルの女」時制分布図



コード番号	時制名	コード番号	時制名	コード番号	時制名
90	命令法	130	直説法前未来	170	直説法半過去
100	直説法複合過去	140	条件法現在	180	直説法単純過去
110	直説法現在	150	条件法過去	190	直説法前過去
120	直説法単純未来	160	直説法大過去	200	接続法

このような図式の最大の長所は、テクストにおける時制分布の全体像が一目で把握できることである。この図はグラフの形をしているが、実のところはグラフではない。縦軸の時制コードは連続量を表すわけではなく、単なる識別のための記号にすぎないからである。したがって、図の中での上下の変化はなんらかの量的な変化に対応するわけではない。この図から読み取れることは、どのような時制がどのような順に現れるか、また、時制が同質的に移行するか、異質的に移行するかということである。色分け、アルファベットなどより適切な形があり得ると思うが、このような留保をしても、全体を見渡すことができるというメリットがあるため、現時点ではこの形を採用することにする。

以上のようにして作成したコーパスと分析の基礎データは本稿末に補遺として掲載した。

それでは、次にここで取り出した時制分布のテクストにおける意味を考えてみよう。

#### IV. データの解釈

##### 1. 時制分布の一般的特徴：基本時制と個別時制

この分布を見て何よりもまず最初に気付くのは、時制がランダムに推移するのではなく、一定のまとまりをなして移行するということである。範例の中では等価に扱われる諸時制もテクストの中での使用頻度、出現様態には大きな差がある。とりわけ、大過去や条件法、前過去、接続法など、比較的の頻度が低く、個別的に現れる時制と、現在、半過去、単純過去のように非常に頻度が高く、まとまって用いられる時制の二極分解が認められる。筆者が先の研究において行った調査でも、語りのテクストにおいて頻度の高い時制は、半過去、単純過去、（そして意外にも）直説法現在で、それ以外の時制とは明確に頻度の差が認められた<sup>10)</sup>。また、新聞記事など語り以外のテクストの場合は、直説法現在が基本時制になっていること

が多い<sup>11)</sup>。このような時制による使用頻度の違いは、我々の日常的な言語意識にも適っている。前過去などの時制に出会うことは書き言葉でも多くはない。

多くのテクストを分析すると、テクストは通常、安定した連續性を作る基本時制をベースに構成されていることが分る。そして、そこに個別時制が何らかの変化をもたらし、その変化の現れ方にジャンルの特徴やテクストの固有性が認められる。分析を始めるに当たって、ここでは当面操作概念として、「基本時制」と「個別時制」を区別するが、その性質については、具体的なテクストの分析結果を踏まえてた上で再考すべきと考えている。

## 2. 内容構成

次にテクストの内容構成を概観し、これに時制がどのように関わっているかを調べてみよう。

### 2. 1. 段落構成

「アルルの女」はドーデの『風車小屋だより』に収められた若者ジャンの悲恋の物語である。物語の内容は、大きく分けて三つの場面に分けられる。最初は、語り手の「私」が悲劇を耳にするまでの導入部。第二部は、主人公がアルルの女に恋をし婚約にまで至るが、結婚直前の宴で、女性が他の男の愛人であったことが明かされるまで。第三部では、誇り高い主人公が名誉と恋心に引き裂かれ、ついには死に至る過程が描かれる。

事態の経過に従って記述することが「語り」の最大の特徴と言われるが<sup>12)</sup>、このテクストも基本的には、時間の経過に沿って描かれている。

10) 西村淳子「動詞時制から見たテクスト構成の手法」、1999年、pp. 58-59.

11) 複合過去の頻度が高いテクストは存在するが、これが基本時制として一貫性、結束性をつくることになっているかは、今後の検討課題である。

12) T. REINHART, "Principes de perception des formes et organisation temporelle des textes narratifs", 1986, p. 46.

ただし、この特徴は絶対的なものではない。むしろ、これは原則であり、原則が破られることによって特別な効果がもたらされる。第一段落と後の二つの段落の間には、時間の逆転がある。事件が起った後でしかその話を聞くことができないので、当然第一段落の内容は、二、三段落が終わつたあの出来事である。しかし、第一段落と第二、三段落の間にある断絶は、時間的なものだけではなく、次元の違い、世界の違いに対応する。第二、三段落の悲劇は、第一段落の登場人物から聞いた話であり、語るという行為に関して、物語の内容（対象）と語り手（主体）という関係が認められるのである。したがって、語り手は第一段落の世界の住人ではあるが、第二、第三段落の世界については、世界の外にいる語り手にすぎない。

## 2. 2. クライマックス

一、二、三各々の段落は、比較的ゆったりとした記述で始まる。しかし、それぞれの段落にクライマックスが用意されている。第一段落のクライマックスは、悲劇の主人公の家族との出会い、第二段落は、女性の過去の暴露、第三段落はジャンの自殺である。

## 3. 時制の推移

### 3. 1. 第一段落の時制

#### 3. 1. 1. 基本時制

第一段落は、「私」の風車から農家に至る道程の記述で始まる。この部分は直説法現在が用いられている。しかし、これは過去、未来などに対立する限定された現在ではなく、普遍的、一般的時間を表す。一般化の働きのある代名詞 *on* も直説法現在が発話の現在ではなく、普遍時間を表すために貢献している。

*on passe<sup>1</sup> devant un mas...*

「農家」の前を通る。(p. 46.)

次に、農家付近の描写が半過去中心に行われる。

Pourquoi ce portail me serrait<sup>5</sup>-il le coeur?...des valets silencieux achevaient<sup>16</sup> de charger une charrette de foin...。

どうしてこの閉ざされた門が私の胸を痛ませるのか、...男たちが黙々とまぐさを荷車に積んでいる... (p. 46.)

そして、 “Je jetai<sup>18</sup> un regard en passant, et je vis<sup>19</sup>” (「通りがかりにのぞいてみると」(p. 46.) に始まるこの段落のクライマックスでは、農家の人々との出会いが単純過去で描かれる (セリフの部分を除く)。直前の半過去による風景描写は、この出来事と対照をなし、背景／前景という浮き彫り構造をつくっている。

このように、第一段落の基本時制は、直説法現在→半過去→単純過去へと移行し、時間的には、限定のない不特定な時間から習慣的時間、そして特定時間へと次第に限定を強める。

### 3. 1. 2. 個別時制

#### 3. 1. 2. 1. 大過去

第一段落で最初に目を引く時制は、大過去である。

Pourquoi cette maison m'avait-elle frappé<sup>4</sup>?

どうしてこの家が私の心を打つのか (p. 46.)

大過去は、過去の一時点を基準として、そのとき完了している出来事を表す。したがって、本来は基準時点がすでに了解されているはずである。しかし、この文は物語りの冒頭に位置するため、そのような基準点は先行文脈や状況には与えられていない。そこで、聞き手は、話者が念頭においているはずの基準時点を後の文脈に期待せざるを得ない。通常の大過去が

前方照応的だとすると、この大過去は後方照応的な用法なのである。

半過去も、基準時点を要求することは大過去と同じである。ここで、半過去を用いるか大過去を用いるかは、むしろ動詞の価値に関係している。frapper「心を打つ」のようないわゆる「達成動詞」は大過去などの完了時制と結びつき、過去に行われた行為の結果（の状態）を表す。これに対して、faire froid, avoirなどの「状態動詞」は、半過去に置かれてまさにその時点の状態を表す。どちらも同じ時の状態である<sup>13)</sup>。

### 3. 1. 2. 2. 直接話法における「説明」時制

物語に「説明」時制<sup>14)</sup>が現れる典型的な場合が登場人物の言葉である。説明時制とは、話者の世界につながる事態を表す。直接話法のセリフは、物語の世界に様々な視点を導入する。テクスト構成上は、重要な場面を、語り手とは違う物語りの当事者の視点から、臨場感豊かに描くのに用いられる。ここでも、セリフはクライマックス部分に現れている。

### 3. 1. 2. 3. クライマックス直前のクローズアップ

もう一つ注目に値すべき現象は、クライマックス直前に現れるクローズ

13) Vendler は動詞を、時間的、アスペクト的価値に基づいて 4 種類に分類した。「完了動詞」は一定期間継続し完成を含意する動詞。点的な時間表現とは相容れない。\*Il écrit une page à 8h. 「彼は 8 時に 1 ページ書いた」は不可／Il écrit une page en un mois 「彼は 1 ヶ月で 1 ページ書いた」は可。「活動動詞」は、均質で到達点のない過程を表す動詞。\*Il a nagé en une heure 「彼は一時間で泳いだ」は不可。Il a nagé à midi 「彼は正午に泳いだ」は可。達成を含意し、継続性のない「達成動詞」は、点的な時間表現とは馴染むが、期間を表す時間表現とは共起しない。Il a aperçu Jean à 8h. 「彼は 8 時にジャンを見かけた」は可。\*Il a aperçu Jean pendant une minute. 「彼は 1 時間ジャンを見かけた」は不可。そして、「状態動詞」は、行為者も到達点ももたず、点的な時間表現とも期間を表す表現とも相容れない。\*Lea est belle à midi. 「レアは正午に美しい」は不可。\*Lea est belle en une heure. 「レアは一時間美しい」も不可。Z. VENDLER, *Linguistics in Philosophy*, 1967, pp. 97-121. 仏語の例は D. MAINGUENEAU, *Approche de l'énonciation en linguistique française*, 1981, pp. 47-48.

14) 「説明時制」とは事態を話者の世界につながる出来事として述べる時制である（直説法現在、単純未来、複合過去等々）。「語り」時制（単純過去、前過去など）に対立する。この「説明」対「語り」という対立は、Benveniste が「談話」discours 対「歴史」histoire と呼んだ発話態度の対立に対応する。西村淳子「動詞時制から見たテクスト構成の手法」，1999, p. 179.

アップ表現 (je) revenais と (des valets) achevaient de である。

Hier, sur le coup de midi, je revenais<sup>14</sup> du village

昨日、昼に、私は村からの帰りがけ、(p. 46)

des valets silencieux achevaient<sup>16</sup> de charger une charrette de foin

男たちが黙々とまぐさを荷車に積んでいる...。(p. 46)

時制は動詞の活用語尾として実現するが、動詞そのものが時制の価値と干渉する場合がある。revenir や achever de などは「達成動詞」<sup>15)</sup>で、行為の達成を含意する。期間を表す時間表現（例えば、en un mois 「1ヶ月で」や pendant une heure 「1時間」など）とは相容れない。したがって、これらの動詞の表す行為は継続することではなく、半過去の持つ継続的反復的アスペクトと干渉するかに見える。ところが、ここでは非継続的アスペクトを持つ動詞と半過去の継続アスペクトの組み合わせが、一つの時点を拡大し、クローズアップする効果を生み出す。このような現象は、伝統的には「絵画的半過去」と呼ばれている<sup>16)</sup>。しかしここで問題にするのは、これらの表現の現れるテクスト中の位置である。描写は、不特定な一般的な時間から、習慣的時間へと移行し、hier という表現によって、特定時間に焦点を結ぶ。その特定時間の入り口にこれらの表現が現れる。これによって、描写の射程が限定され、限定された時間が拡大されて記述される。比喩を用いるなら、広い広角的描写から特定の場所に焦点が合ったとき、カメラが一点をクローズアップし、その点を綿密に描写することになるのである。

### 3. 2. 第二段落の時制

#### 3. 2. 1. 基本時制

15) 上記注13参照。

16) 春木仁孝：「動詞のあらわすもの 一時制・アスペクト・モダリティー」，1993, p. 161.

ジャンの悲恋の物語は第二段落から始まる。

Il s'appelait<sup>37</sup> Jan. C'était<sup>38</sup> un admirable paysan de vingt ans

彼はジャンといった。二十歳になる立派な百姓で, (p. 47)

ジャンの紹介, 婚約に至るまでの経緯は, 半過去を中心に単純過去も交えて語られる。ここでは特定時間に限定されない習慣的, 反復的行為が描かれる。単純過去は三か所で, 筋の展開に貢献している。つまり, 第二段落前半は, 背景中心の浮き彫り構造になっている。

そして, un dimanche soir 「ある日曜日の夕方」 という時間表現とともに, いよいよ宴の場面となり, 明確に特定時間に焦点が合う。時制は半過去に始まり, 女の愛人の登場とともに直説法現在に切り替わる。いわゆる歴史的現在, 物語現在と呼ばれる現在時制の用法である。主人公の父親とこの男の会見の場面は, 物語現在から二人の会話の直接話法, そして物語現在の順に進行する。

La fiancée n'y assistait<sup>54</sup> pas, mais on avait bu<sup>55</sup> en son honneur tout le temps...

Un homme se présente<sup>56</sup> à la porte, et, d'une voix qui tremble<sup>57</sup>, demande<sup>58</sup> à parler à maître Estève, à lui seul. Estève se lève<sup>59</sup> et sort<sup>60</sup> sur la route.

席には見えなかつたが, 新婦のために皆は絶えず杯をあげた...すると一人の男が戸口に現われ, 声をふるわせて, エステーヴ親方に話がしたい, 親方にだけ, といった。エステーヴは立ち上がって往来へ出た。(p. 48)

物語現在と単純過去の関係は, 演劇と映画に例えることができる。物語の世界と読者の世界には越えがたい次元の違いがあるが, 映画ならばこの違いはスクリーンによって顕在化している。これが, 話者の世界とは切り離された次元の出来事を表す単純過去である。一方, 演劇の場合は, 見物人と役者は, 異なる次元の存在でありながら同じ空間, 同じ時間を生きる

生身の人間である。そこから、呼べば答えるような臨場感が生まれる。これが話者の世界につながる出来事を表す物語現在である<sup>17)</sup>。

宴の場面が終わり；その直後 (*ce soir-là*) のジャンと父親の様子は、再び単純過去と半過去の浮き彫り構造で描かれる。クライマックスの肉迫するような物語現在の臨場感は、単純過去による別次元の出来事の記述へと戻り、落ち着きを取り戻す。

第二段落全体を見ると、次のような構成になっている。

不特定時間（事件に至る経緯の説明）：	半過去中心+単純過去
→特定時間（暴露）：	物語現在
→特定時間（暴露後）：	単純過去中心+半過去

### 3. 2. 2. 個別時制：クローズアップ

第一段落でも問題にしたクローズアップ表現が宴の始まりを告げる文の中にも見られる。

Un dimanche soir, dans la cour du mas, la famille achevait<sup>52</sup> de dîner

ある日曜日の夕方、農家の広場では、家族の夕食が済みかけていた (p. 48)。

ここでも注目すべきことは、この表現がまさにクライマックスの始まろうとする時点用いられ、表現のクローズアップ効果が場面全体に及んでいることである。つまり、食事を終えた時点を挟んで、それ以前の記述とそれ以後とでは、記述の細かさに変化があるのである。この場所でカメラが一点をクローズアップし、その点を綿密に描写することになる。しかも、その描写が物語現在や、登場人物の言葉であるため、物語の世界が読者の世界と連続しているかのような臨場感が生まれている。

17) 西村淳子：「動詞時制から見た物語りの多元的構成」，1999年，pp. 61-65.

#### 4. 第三段落

##### 4. 1. 基本時制

第三段落前半では、暴露後のジャンの様子が、習慣的状態、反復的行為として描かれる。ここでは、単純過去と半過去が混在している<sup>18)</sup>。

Jan ne parla<sup>89</sup> plus de l'Arlésienne. Il l'aimait<sup>90</sup> toujours cependant, /.../ Quelquefois il passait<sup>95</sup> des journées entières seul dans un coin, sans bouger. D'autres jours, il se mettait<sup>96</sup> à la terre avec rage et abattait<sup>97</sup> à lui seul le travail de dix journaliers...

ジャンはもうアルルの女の話をしなかった。しかしいつも彼女を愛していた。/.../ある時は朝から晩またた一人片隅でじっと過ごした。また他の日にはもの狂おいしいように畠に出て、一人で日雇い十人前の仕事をやってのけた  
... (p. 49)

De le voir ainsi, toujours triste et seul, 「こんなふうに彼がいつも悲しそうに一人でいるのを見ると」(p. 49) で始まる次の第一節で描かれるのは、クライマックスに至るまでの経緯である。一回限りの出来事 (Une fois, à table,... 「ある時、食卓で...」(p. 49)) を含むが、それがいつなのかは特定されない。

そして、「聖エロワの日」からが特定の時間の出来事である。ここでは単純過去が頻繁に用いられている。しかし、これは半過去を背景とする前景とは考えにくい。これらの単純過去に置かれた行為は事態の経過を継続的に追っているわけではないからである。つまり、この部分での単純過去は、前景ではなく、クライマックスに至るまでの経緯を圧縮して要約しているのである<sup>19)</sup>。

18) 「4. 2. 1. 否定文中の単純過去の圧縮効果」参照。

19) 「4. 2. 2. 繼続的反復的行為を圧縮する単純過去」参照。

Le lendemain, à l'aube, 「翌日、明けがたに」(p. 50)からいよいよ主人公の自殺の場面になる。最初は単純過去で始まるが、直接話法による母親の言葉として直説法現在が導入されると、そのまま描写も物語現在に切り替わる。そして、主人公そのものよりも母親が息子を追う姿が描写され、飛び下りた音が聞こえるところまで物語現在が用いられている。

最後に、語り手のコメントがやはり直説法現在で挿入され、翌朝の状況が、村人の視点から単純過去と半過去によって描写される。

第三段落の構成を総合すると、下のようになる。

→反復的、習慣的時間：単純過去+半過去

→特定時間（クライマックスまでの経緯説明）：

単純過去+半過去 要約の単純過去

→自殺場面：直接話法+物語現在

→話者のコメント：直説法現在

→その後の情景：単純過去+半過去

#### 4. 2. 個別時制

##### 4. 2. 1. 否定文中の単純過去の圧縮効果

単純過去と半過去の対立は、通常、記号レベルでは、瞬間相／継続相、あるいは、完結相／未完結相というアスペクトの問題として捉えられ、テクストのレベルでは、前景／背景から成る浮き彫り構造を構成すると考えられている。しかし、単純過去に置かれた動詞が否定されたときは、肯定文と同じように完結的行為を表すわけではない。Jan parla. 「ジャンは話した」という文が、点的な行為を表すとしても、Jan ne parla plus 「ジャンはもう話はしなかった」という文は、同じように点的な行為を表してはいない。このような単純過去は完結相を表すといつても、それは瞬間的な行為ではなく、一定期間の状態（ここでは、暴露後ジャンの死まで）を一つにまとめて圧縮的に捉えているのである。Jamais il n'alla<sup>102</sup> plus loin. 「決してそれより遠くへは行かなかった」(p. 49) や Jan ne dormit<sup>134</sup> pas,

lui. 「しかしジャンは眠らなかった」(p. 50) も同様である。このような場合の単純過去は、半過去で描かれた背景の前で継起的に展開する筋、前景を構成するのではなく、背景も含めて視野に入った範囲全体を圧縮的に捉える効果があると考えられる。

#### 4. 2. 2. 継続的反復的行為を圧縮する単純過去

単純過去は、下の表現のように、継続的な状態を表す動詞とともに用いられると、ある程度継続した期間を圧縮する効果がある。

Il y eut<sup>124</sup> du château-neuf pour tout le monde...

シャトーヌフが飲めるし (p. 50)

ちょうどクローズアップ表現が継続相の時制（半過去）と非継続的な意味をもった動詞との干渉から生じたように、完結相の単純過去と動詞の継続的意味との干渉からは圧縮効果が生まれる。

また、On farandola<sup>127</sup> à mort. 「みんなへとへとになるまで踊った」(p. 50) では、主語の on の不特定性が、単純過去の一回性と葛藤を生じ、何度も踊ったことをまとめて一挙に要約、圧縮する効果を生んでいる。

第三段落では、これらの単純過去がクライマックスに至るまでの経緯を要約的に表すために用いられている。

#### 4. 3. 他の要素との相互作用

第三段落前半には、時間を表す状況補語も多い。そのほとんどが半過去の継続、反復的なアスペクト値を増幅する副詞句である。

Il l'aimait toujours

しかしいつも彼女を愛していた (p. 49)

Quelques fois il passait des journées entières seul dans un coin

## テクストの時制分布と連関の形 西村淳子

ある時は朝から晩までたった一人片隅でじっと過ごした。 (p. 49)

D'autres jours, il se mettait à la terre avec rage

また他の日にはもの狂おしいように畠に出て, (p. 49)

Le soir venu, il prenait la route d'Arles et...

夕方になるとアルルへの道を, (p. 49)

De le voir ainsi, toujours triste et seul,

こんなふうに彼がいつも悲しそうに一人でいるのを見ると, (p. 49)

これに対し, alors や à partir de ce jour は半過去では動かない事態を進行させる。

Alors, il revenait,

そしてそこから引き返すのであった。 (p. 49)

A partir de ce jour, il changea sa façon de vivre, affectant d'être toujours gai...

この日から, 彼は生活振りを変えて, ...いつも陽気なふうを装った。 (p. 50)

以上の分析の結果を表にまとめると以下図5のようになる。また, この結果を分布図に反映させると, 本稿末に添付した図7のようになり, 作品全体の構成を見渡すことができる。

## 5. テクストの特徴

### 5. 1. 基本時制

こうして, この作品を時制構成という点から分析してきたが, ここでこのテクストの時制構成の特徴をまとめて見よう。

(1) 段落構成: 三つの段落に別れ, それぞれがクライマックスをもつ。

第一段落の基本時制は直説法現在→半過去→単純過去, 第二段落は, 半過去中心+単純過去の浮き彫り構造→直説法現在 (物語現在) →単純過去中心+半過去, 第三段落は, 半過去, 単純過去→

図5 「アルルの女」内容構成と時制等形式構成

段落	小区分	動詞現号	テーマ	時制 下線は 基本時制	時間表現など時制 に直接影響を及ぼ す要素	時間性
I	I- 1	1~3	「私の風車小屋」 から農家までの道	現在	on	普遍的、一般的時 間
	I- 2	4~13	農家の記述	大過去 条件法過去 半過去	on	習慣的時間 後方照応の大過去
	I- 3	14~36	ジャンの家族との 出会い	単純過去 現在 半過去	hier, sur le coup de midi, revenais de	特定時間 直接語法 拡大の半過去
II	II- 1	37~51	ジャンの紹介 婚約までの経緯	半過去 単純過去 条件法過去 現在	Achevaient de	時間の逆転（次元 の切り替わり） 習慣的反復的時間 浮き彫り 拡大の半過去
	II- 2	52~81	婚約の宴	半過去 単純過去 現在 前過去	un dimanche soir, tout le temps, achevait de	特定時間 物語現在 直接語法 拡大の半過去
	II- 3	82~88	女性の過去を暴露 直後	単純過去 半過去 現在	ce soir-là	特定時間 浮き彫り
III	III- 1	89~102	暴露後のジャンの 態度 (悲しみ)	単純過去 平過去 現在	Toujours, Quelques fois, d'autres jours, Le soir venu, Alors, Jamais	不特定な習慣的 反復的時間 圧縮の単純過去 (否定文)
	III- 2	103~122	母の慰め ジャンの拒否	単純過去 半過去	Toujours, une fois, A partir de ce jour, Toujours	習慣的時間 同定されない特定 時間
	III- 3	123~164	ジャンの死までの 出来事	単純過去 平過去 現在	la fête de saint Eloi, A minuit, Le lendemain, à l'aube, Ce matin-là	特定時間 圧縮の単純過去 (繰り返し、反復動詞) 語りのコメント 物語現在

直説法現在（物語現在）→単純過去、半過去となる。

(2) 時間の推移：通常の語りの文同様、この物語りも原則的には時間の推移に従って描かれている。しかし、第一段落と第二段落の間

に時間の逆転がある。これは、物語りの中心になるジャンの悲劇が登場人物からの伝聞という形で語られるためである。したがって、この逆転は同一次元における時間の逆転ではなく、「語り手の共有する世界」対「語り手の共有しない語るだけの世界」という次元の違いに対応する。

- (3) 時間の特定化：三つの段落がすべて不特定時間から特定時間に向けて進行する。そして、明確に特定時間に焦点が絞られたときにクライマックスが訪れる。第一段落は、もっとも一般性の高い普遍時間の記述で始まり、習慣的時間から特定時間へと移行する。第二、第三段落は習慣的時間から特定時間への移行となる。両段落とも、クライマックスでは、物語現在が物語の世界と話者、読者の世界との次元の違いを潜在化させ、臨場感を高めている。

## 5. 2. 個別時制

上のような流れの中で、興味ある時制の使用法が幾つか認められる。

### (1) 後方照応的大過去：

視点を要求する大過去が物語りの冒頭に現れ、物語りの筋となる出来事の到来を期待させる（第一段落）

Pourquoi cette maison m'avait-elle frappé<sup>4</sup>?

どうしてこの家が私の心を打つのか (p. 46.)

### (2) 拡大の半過去

瞬間相を表す動詞と継続相の半過去が組み合わされたクローズアップ表現 (*revenais de, achevait de*) がクライマックスの直前に現れ、瞬間を引き延ばすだけではなく、場面の記述全体を拡大する。（第一、第二段落）

Hier, sur le coup de midi, je revenais<sup>14</sup> du village

昨日、昼に、私は村からの帰りがけ、(p. 46)

des valets silencieux achevaien<sup>16</sup> de charger une charrette de foin

男たちが黙々とまぐさを荷車に積んでいる… (p. 46)

Un dimanche soir, dans la cour du mas, la famille achevait<sup>52</sup> de dîner

ある日曜日の夕方、農家の広場では、家族の夕食が済みかけていた (p. 48)。

### (3) 圧縮の単純過去（第三段落）

- 否定文中：瞬間的行為を表す動詞も継続的行為を表す動詞も単純過去におかれ否定されると、一定期間継続した状態を圧縮的に表現することになる。

Jan ne parla<sup>89</sup> plus de l'Arlésienne.

ジャンはもうアルルの女の話はしなかった (p. 49)

Jamais il n'alla<sup>102</sup> plus loin.

決してそれより遠くへは行かなかった (p. 49)

Jan ne dormit<sup>134</sup> pas,

しかしジャンは眠らなかった (p. 50)

### ●継続的反復的行為の動詞

Il y eut<sup>124</sup> du château-neuf pour tout le monde...

シャトーヌフが飲めるし (p. 50)

On farandola<sup>127</sup> à mort.

みんなへとへとになるまで踊った (p. 50)

これらの単純過去の特徴は、浮き彫り構造における前景のように完結する出来事を継起的に描くのではなく、一定期間の状態を並列的、要約的に語ることである。

## 5. 2. 諸要素との親和性と干渉

テクストの時間構成は、動詞時制をベースに、代名詞、時間を表す補語、動詞の語彙的な意味などが影響し、作用しあった総合的な結果としてテキストに実現する。時制であれ、他の要素であれ、個々の記号の可能的な価値は広く多様であり、その中の特定の価値がテクストに実現するのは、一つのテクストの中でこれらの異質な要素が出会い、類似の価値を強調し合ったり、干渉しあうことによる。これがテクストの織りなす複雑な模様となるのである。

このテクストにおいても、次のような要素は、動詞時制のもつ価値に直接影響を及ぼしていると考えられる。

- 普遍化、一般化を促す表現：on
- 習慣性、反復性を表す時間表現：toujours, quelques fois, d'autres jours,
- 一回的であるが特定されない時間の表現：une fois
- 筋の進行に寄与する時間表現：alors, à partir de ce jour
- 特定化を促す表現：hier, sur le coup de midi, le soir venu, la fête de saint Eloi, à minuit, le lendemain, à l'aube, ce matin-là

## V. むすび

以上、一つの物語りの時制分布を視覚的に明示し、そこから、テクストにおける時制相互の関係、および時制以外の要素との相互作用が生み出す内容構成を考察してきた。このように時制研究の視点を動詞語尾という記号からテクストへと移すことにより、言語活動の本質的な側面、すなわち、話者が限定された言語記号を操作し、一貫した独自のテクスト世界を構築していく過程を垣間見ることができると考える。

文献表

- BENVENISTE, E.: "Les relations des temps dans le verbe français", *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966.
- CHARANDEAU, P. et D. MAINGUENEAU: *Dictionnaire d'analyse du discours*, Seuil, 2002.
- DAUDET, A.: *Lettres de mon Moulin*, Fasquelle, 1973, pp. 61-68.
- ドーデ, A.: 『風車小屋だより』, 桜田佐訳, 岩波書店, 1974, pp. 46-52.
- FRANÇOIS, F.: *Pratique de l'Oral*, Nathan, 1993.
- "Linguistique de la langue et dialogue avec les textes, un point de vue", *La Linguistique*, vol. 39, fasc. 2/2003, pp. 61-74.
- GOSSELIN, L.: *Sémantique de la temporalité en français*, Louvain-la-Neuve, Duculot, 1996.
- GOUVARD J.-M.: *La Pragmatique. Outils pour l'analyse littéraire*, Paris, A. Colin, 1998.
- ハリディ, M.A.K., ハッサン, R.: 『テクストはどのように構成されるか』, 安藤貞雄, 多田保行, 永田龍男, 中川憲, 高口圭轉訳, ひつじ書房, 1997年。
- 春木仁孝: 「動詞のあらわすもの 一時制・アスペクト・モダリティー」, 大橋保夫他著『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, 1993年, pp. 143-168.
- LABEAU E., LARRIVEE P.: *Les temps du passé français et leur enseignement*, Rodopi, Amsterdam, New York, 2002.
- LAGAE, V., CARLER, A., BENNINGER, C.: *Temps et aspect: de la grammaire au lexique*, Rodopi, Amsterdam, New York, 2002.
- LEEMAN-BOUIX, D.: *Grammaire du verbe français des formes au sens*, Nathan, 2002.
- MAINGUENEAU, D.: *Approche de l'énonciation en linguistique française, embrayeurs, «temps», discours rapporté*, Paris, Hachette, 1981.
- MAINGUENEAU, D.: *Linguistique pour le texte littéraire*, Nathan, 2003, (1re éd. 1986, Bordas).
- MAINGUENEAU, D.: *L'Enonciation en linguistique française*, Paris Hachette, «Les Fondamentaux», 1994.
- MARTIN, R.: *Temps et aspect: Essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Paris, Klincksieck, 1971.
- MOESCHLER, J. et Anne REBOUL: *Dictionnaire encyclopédique de Pragmatique*, Seuil, 1994.
- MULDER, W. de et Co VET, (éd.): "Temps Verbaux et relations discursives", *Travaux de linguistique*, 39, DUCULOT, 1999.
- MOLENDIJK, A.: *Le passé simple et l'imparfait: une approche reichenbachienne*, Amsterdam/Atlanta, Rodopi, 1990.
- 西村淳子: 「動詞時制から見たテクスト構成の手法—「説明」時制、「語り説明」時制の分布と物語りの全体構成—」『武藏大学人文学会雑誌』第30卷第2・3号, 1999年。
- 西村淳子: 「動詞時制から見た物語りの多元的構成—「語り」時制/「説明」時制の局所的交替が生み出すテクスト効果—」『武藏大学人文学会雑誌』第31卷第1号, 1999年。
- RABATEL, A.: *La Construction textuelle du point de vue*, Lausanne, Delachaux et Niestlé, 1998.
- REBOUL, A., J. MOESCHLER: *Pragmatique du discours, De l'interprétation de l'énoncé à l'interprétation du discours*, Armand Colin, Paris, 1988.

テクストの時制分布と連関の形 西村淳子

- REINHART, T.: "Principes de perception des formes et organisation temporelle des textes narratifs", *Recherches linguistiques de Vincennes*, 14-15, 1986, pp. 45-92.
- RIVARA R.: *La langue du récit*. Introduction à la narratologie énonciative, Paris, L'Harmattan, 2000.
- TOURATIER, C. (1996), *Le système verbal français (Description morphologique et morphématische)*, Armand Colin, 1996.
- VASSANT, A.: "Ambiguité et mésaventure d'une théorie linguistique, Les relations de temps dans le verbes français d'E. Benveniste", in *l'Information Grammaticale* 9, pp. 13-19, 1981.
- VENDLER, Z.: *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Thaca, New York, 1967.
- VET, Co: *Langue française 67*, La Pragmatique des Temps Verbaux, 1985.
- VETTERS, C.: *Temps, aspect et narration*, Amsterdam/Atlanta, 1996.
- VUILLAUME M.: *Grammaire temporelle des récits*, Paris, Editions de Minuit, 1990.
- WEINRICH, H.: *Tempus*, Besprochene und erzählte Welt, W. Kohlhammer GmbH. 1971.  
『時制論』, 脇阪豊, 大瀧敏夫, 竹島俊之, 原野昇訳, 紀伊國屋書店, 1982年。  
*Le Temps*, traduit par Michèle LACOSTE, Seuil, Paris, 1973.

(2004年5月27日 受理)

## 補遺

### 基礎資料

1. ヨーバス 言語資料 : L'Arlésienne
2. 図6 「アルルの女」時制分布表1—5
3. 図7 「アルルの女」時制分布分析図

### ヨーバス 言語資料

#### L'ARLÉSIENNE<sup>1)</sup>

Pour aller au village, en descendant de mon moulin, on passe<sup>1</sup> devant un *mas* bâti près de la route au fond d'une grande cour plantée de micocouliers. C'est<sup>2</sup> la vraie maison du *ménager* de Provence, avec ses tuiles rouges, sa large façade brune irrégulièrement percée, puis tout en haut la girouette du grenier, la poulie pour hisser les meules et quelques touffes de foin brun qui dépassent<sup>3</sup>...

Pourquoi cette maison m'avait-elle frappé<sup>4</sup>? Pourquoi ce portail fermé me serrait<sup>5</sup>-il le coeur? Je n'aurais pas pu<sup>6</sup> le dire, et pourtant ce logis me faisait<sup>7</sup> froid. Il y avait<sup>8</sup> trop de silence auto-ur... Quand on passait<sup>9</sup>, les chiens n'aboyaient<sup>10</sup> pas, les pintades s'enfuyaient<sup>11</sup> sans crier... À l'intérieur pas une voix! Rien, pas même un grelot de mule... Sans les rideaux blancs des fenêtres et la fumée qui montait<sup>12</sup> des toits, on aurait cru<sup>13</sup> l'endroit inhabité.

Hier, sur le coup de midi, je revenais<sup>14</sup> du village, et, pour éviter le soleil, je longeais<sup>15</sup> les murs de la ferme, dans l'ombre des micocouliers... Sur la route, devant le *mas*, des valets silencieux achevaient<sup>16</sup> de charger une charrette de foin... Le portail était resté<sup>17</sup> ouvert. Je jetai<sup>18</sup> un regard en passant, et je vis<sup>19</sup>, au fond de la cour, accoudé, -la tête dans ses mains, -sur une large table de pierre, un grand vieux tout blanc, avec une veste trop courte et des culottes en lameaux... Je m'arrêtai<sup>20</sup>. Un des hommes me dit<sup>21</sup> tout bas:

«Chut! c'est<sup>22</sup> le maître... Il est<sup>23</sup> comme ça depuis le malheur de son fils.»

À ce moment, une femme et un petit garçon, vêtus de noir, passèrent<sup>24</sup> près de nous avec de gros paroissiens dorés, et entrèrent<sup>25</sup> à la ferme.

L'homme ajouta<sup>26</sup>:

«... La maîtresse et Cadet qui reviennent<sup>27</sup> de la messe. Ils y vont<sup>28</sup> tous les jours, depuis que

1) A. DAUDET: *Lettres de mon Moulin*, Fasquelle, 1973, pp. 61-68.

l'enfant s'est tué<sup>29</sup>... Ah! monsieur, quelle désolation!... Le père porte<sup>30</sup> encore les habits du mort; on ne peut<sup>31</sup> pas les lui faire quitter... Dia! hue! la bête!

La charrette s'ébranla<sup>32</sup> pour partir. Moi, qui voulais<sup>33</sup> en savoir plus long, je demandai<sup>34</sup> au voiturier de monter à côté de lui, et c'est<sup>35</sup> là-haut, dans le foin, que j'appris<sup>36</sup> toute cette navrante histoire...



Il s'appelait<sup>37</sup> Jan. C'était<sup>38</sup> un admirable paysan de vingt ans, sage comme une fille, solide et le visage ouvert. Comme il était<sup>39</sup> très beau, les femmes le regardaient<sup>40</sup>; mais lui n'en avait<sup>41</sup> qu'une en tête, -une petite Arlésienne, toute en velours et en dentelles, qu'il avait rencontrée<sup>42</sup> sur la Lice d'Arles, une fois. -Au mas, on ne vit<sup>43</sup> pas d'abord cette liaison avec plaisir. La fille passait<sup>44</sup> pour coquette, et ses parents n'étaient<sup>45</sup> pas du pays.

Mais Jan voulait<sup>46</sup> son Arlésienne à toute force. Il disait<sup>47</sup>:

«Je mourrai<sup>48</sup> si on ne me la donne<sup>49</sup> pas.»

Il fallut<sup>50</sup> en passer par-là. On décida<sup>51</sup> de les marier après la moisson.

Donc, un dimanche soir, dans la cour du mas, la famille achevait<sup>52</sup> de dîner. C'était<sup>53</sup> presque un repas de noce. La fiancée n'y assistait<sup>54</sup> pas, mais on avait bu<sup>55</sup> en son honneur tout le temps... Un homme se présenta<sup>56</sup> à la porte, et, d'une voix qui tremble<sup>57</sup>, demanda<sup>58</sup> à parler à maître Estève, à lui seul. Estève se lève<sup>59</sup> et sort<sup>60</sup> sur la route.

«Maître, lui dit<sup>61</sup> l'homme, vous allez<sup>62</sup> marier votre enfant à une coquine, qui a été<sup>63</sup> ma maîtresse pendant deux ans. Ce que j'avance<sup>64</sup>, je le prouve<sup>65</sup>; voici des lettres!... ses parents savent<sup>66</sup> tout et me l'avaient promise<sup>67</sup>; mais, depuis que votre fils la recherche<sup>68</sup>, ni eux ni la belle ne veulent<sup>69</sup> plus de moi... J'aurais cru<sup>70</sup> pourtant qu'après ça elle ne pouvait<sup>71</sup> pas être la femme d'un autre.

-C'est<sup>72</sup> bien, dit<sup>73</sup> maître Estève quand il eut regardé<sup>74</sup> les lettres; entrez<sup>75</sup> boire un verre de muscat.»

L'homme répond<sup>76</sup>:

«Merci! j'ai<sup>77</sup> plus de chagrin que de soif.»

Et il s'en va<sup>78</sup>.

Le père rentre<sup>79</sup> impassible: il reprend<sup>80</sup> sa place à table; et le repas s'achève<sup>81</sup> gaiement...

Ce soir-là, maître Estève et son fils s'en allèrent<sup>82</sup> ensemble dans les champs. Ils restèrent<sup>83</sup> longtemps dehors; quand ils revinrent<sup>84</sup>, la mère les attendait<sup>85</sup> encore.

«Femme, dit<sup>86</sup> le ménager en lui amenant son fils, embrasse<sup>87</sup> -le! il est<sup>88</sup> malheureux...»



Jan ne parla<sup>89</sup> plus de l'Arlésienne. Il l'aimait<sup>90</sup> toujours cependant, et même plus que jamais, depuis qu'on la lui avait montrée<sup>91</sup> dans les bras d'un autre. Seulement il était<sup>92</sup> trop fier pour rien dire; c'est<sup>93</sup> ce qui le tua<sup>94</sup>, le pauvre enfant!... Quelquefois il passait<sup>95</sup> des journées entières seul dans un coin, sans bouger. D'autres jours, il se mettait<sup>96</sup> à la terre avec rage et abattait<sup>97</sup> à

lui seul le travail de dix journaliers... Le soir venu, il prenait<sup>98</sup> la route d'Arles et marchait<sup>99</sup> devant lui jusqu'à ce qu'il vit<sup>100</sup> monter dans le couchant les clochers grêles de la ville. Alors, il revenait<sup>101</sup>. Jamais il n'alla<sup>102</sup> plus loin.

De le voir ainsi, toujours triste et seul, les gens du mas ne savaient<sup>103</sup> plus que faire. On redoutait<sup>104</sup> un malheur... Une fois, à table, sa mère en le regardant avec des yeux pleins de larmes, lui dit<sup>105</sup>:

«Eh bien, écoute<sup>106</sup>, Jan, si tu la veux<sup>107</sup> tout de même, nous te la donnerons<sup>108</sup>...»

Le père, rouge de honte, baissait<sup>109</sup> la tête.

Jan fit<sup>110</sup> signe que non, et il sortit<sup>111</sup>...

À partir de ce jour, il changea<sup>112</sup> sa façon de vivre, affectant d'être toujours gai, pour rassurer ses parents. On le revit<sup>113</sup> au bal, au cabaret, dans les ferrades. À la vote de Fontvieille, c'est<sup>114</sup> lui qui mena<sup>115</sup> la farandole.

Le père disait<sup>116</sup>: «Il est<sup>117</sup> guéri.» La mère, elle, avait<sup>118</sup> toujours des craintes et plus que jamais surveillait<sup>119</sup> son enfant... Jan couchait<sup>120</sup> avec Cadet, tout près de la magnanerie; la pauvre vieille se fit<sup>121</sup> dresser un lit à côté de leur chambre... Les magnans pouvaient<sup>122</sup> avoir besoin d'elle, dans la nuit...

Vint<sup>123</sup> la fête de saint Éloi, patron des ménagers.

Grande joie au mas... Il y eut<sup>124</sup> du château-neuf pour tout le monde et du vin cuit comme s'il en pleuvait<sup>125</sup>. Puis des pétards, des feux sur l'aire, des lanternes de couleur plein les micoouliers... Vive<sup>126</sup> saint Éloi! On farandola<sup>127</sup> à mort. Cadet brûla<sup>128</sup> sa blouse neuve... Jan lui-même avait<sup>129</sup> l'air content; il youlut<sup>130</sup> faire danser sa mère; la pauvre femme en pleurait<sup>131</sup> de bonheur.

A minuit, on alla<sup>132</sup> se coucher. Tout le monde avait<sup>133</sup> besoin de dormir... Jan ne dormit<sup>134</sup> pas, lui. Cadet a raconté<sup>135</sup> depuis que toute la nuit il avait sangloté<sup>136</sup>...

Ah! je vous réponds<sup>137</sup> qu'il était<sup>138</sup> bien mordu, celui-là...

Le lendemain, à l'aube, la mère entendit<sup>139</sup> quelqu'un traverser sa chambre en courant. Elle eut<sup>140</sup> comme un pressentiment:

«Jan, c'est<sup>141</sup> toi?»

Jan ne répond<sup>142</sup> pas; il est<sup>143</sup> déjà dans l'escalier.

Vite, vite la mère se lève<sup>144</sup>:

«Jan, où vas<sup>145</sup>-tu?»

Il monte<sup>146</sup> au grenier; elle monte<sup>147</sup> derrière lui:

«Mon fils, au nom du Ciel!»

Il ferme<sup>148</sup> la porte et tire<sup>149</sup> le verrou.

«Jan, mon Janet, réponds<sup>150</sup>-moi. Que vas<sup>151</sup>-tu faire?»

À tâtons, de ses vieilles mains qui tremblent<sup>152</sup>, elle cherche<sup>153</sup> le loquet!... Une fenêtre qui s'ouvre<sup>154</sup>, le bruit d'un corps sur les dalles de la cour, et c'est<sup>155</sup> tout...

Il s'était dit<sup>156</sup>, le pauvre enfant: «Je l'aime<sup>157</sup> trop... Je m'en vais<sup>158</sup>...» Ah! misérables coeurs que nous sommes<sup>159</sup>! C'est<sup>160</sup> un peu fort pourtant que le mépris ne puisse<sup>161</sup> pas tuer l'amour!...

テクストの時制分布と連関の形 西村淳子

Ce matin-là, les gens du village se demandèrent<sup>162</sup> qui pouvait<sup>163</sup> crier ainsi, là-bas, du côté du *mas* d'Estève...

C'était<sup>164</sup>, dans la cour, devant la table de pierre couverte de rosée et de sang, la mère toute nue qui se lamentait<sup>165</sup>, avec son enfant mort sur ses bras.

図6「アルルの女」時制分布表1

番号	テクスト抜粋	コード	時制
1	on passe devant un mas	110	現在
2	c'est la vraie maison du ménager de Provence	110	現在
3	qui dépassent	110	現在
4	cette maison m'avait-elle frappé	160	大過去
5	ce portail fermé me serrait-il le cœur?	170	半過去
6	je n'aurais pas pu le dire	150	条件法過去
7	ce logis me faisait froid	170	半過去
8	il y avait trop de silence autour	170	半過去
9	Quand on passait	170	半過去
10	les chiens n'aboyaient pas	170	半過去
11	les pintades s'envuyaient sans crier	170	半過去
12	la fumée qui montait des toits,	170	半過去
13	on aurait cru l'endroit inhabité	150	条件法過去
14	je revenais du village	170	半過去
15	je longeais les murs de la ferme	170	半過去
16	des valets silencieux achevaient de changer une charrette de foin	170	半過去
17	Le portail était resté ouvert	160	大過去
18	je jetai un regard en passant	180	単純過去
19	je vis.... ,accoudé...un grand vieux	180	単純過去
20	Je m'arrêtai.	180	単純過去
21	un des hommes me dit	180	単純過去
22	c'est le maître...	110	現在
23	il est comme ça depuis le malheur	110	現在
24	une femme et un petit garçon passèrent	180	単純過去
25	(une femme et un petit garçon) entrèrent	180	単純過去
26	l'homme ajouta:	180	単純過去
27	La maîtresse et Cadet qui reviennent de la messe	110	現在
28	ils y vont tous les jours	110	現在
29	l'enfant s'est tué...	100	複合過去
30	le père porte encore les habits du mort	110	現在
31	on ne peut pas les lui faire quitter	110	現在
32	la charrette s'ébranla pour partir	180	単純過去
33	moi, qui voulais en savoir plus long	170	半過去
34	je demandai au voiturier de monter	180	単純過去
35	c'est là-haut, dans le foin, que...	110	現在
36	j'appris toute cette navrante histoire...	180	単純過去

図6「アルルの女」時制分布表2

番号	テクスト抜粋	コード	時制
37	Il s'appelait Jan.	170	半過去
38	c'était un admirable paysan de vingt ans	170	半過去
39	il était très beau,	170	半過去
40	les femmes le regardaient;	170	半過去
41	lui n'en avait qu'une en tête	170	半過去
42	il avait rencontré sur la Lice d'Arles,	160	大過去
43	on ne vit pas d'abord cette liaison avec plaisir	180	単純過去
44	La fille passait pour coquette,	170	半過去
45	ses parents n'étaient pas du pays	170	半過去
46	Jan voulait son Arlésienne à toute force	170	半過去
47	il disait:	170	半過去
48	je mourrai	120	単純未来
49	on ne me la donne pas	110	現在
50	il fallut en passer par-là.	180	単純過去
51	on décida de les marier après la moisson.	180	単純過去
52	la famille achevait de dîner	170	半過去
53	c'était presque un repas de noce	170	半過去
54	La fiancée n'y assistait pas,	170	半過去
55	on avait bu en son honneur tout le temps	160	大過去
56	Un homme se présente à la porte	110	現在
57	une voix qui tremble,	110	現在
58	(un homme) demande à parler à maître Estève	110	現在
59	Estève se lève	110	現在
60	(Estève) sort sur la route	110	現在
61	lui dit l'homme	110	現在
62	vous allez marier votre enfant à une coquine,	110	現在
63	une coquine qui a été ma maîtresse pendant deux ans	100	複合過去
64	ce que j'avance	110	現在
65	je le prouve	110	現在
66	ses parents savent tout	110	現在
67	(ses parents) me l'avaient promise	160	大過去
68	depuis que votre fils la recherche	110	現在
69	ni eux ni la belle ne veulent plus de moi	110	現在
70	j'aurais cru pourtant qu'après ça...	150	条件法過去
71	elle ne pouvait pas être la femme d'un autre	170	半過去
72	c'est bien	110	現在

図6「アルルの女」時制分布表3

番号	テクスト抜粋	コード	時制
73	dit maître Estève	180	単純過去
74	il eut regardé les lettres;	190	前過去
75	entrez	90	命令法
76	l'homme répond:	110	現在
77	j'ai plus de chagrin que de soif.	110	現在
78	il s'en va.	110	現在
79	le père rentre, impassible,	110	現在
80	il reprend sa place à table	110	現在
81	le repas s'achève gaiement...	110	現在
82	maître Estève et son fils s'en allèrent	180	単純過去
83	ils restèrent longtemps dehors:	180	単純過去
84	ils revinrent,	180	単純過去
85	la mère les attendait encore	170	半過去
86	dit le ménager,	180	単純過去
87	embrasse-le	90	命令法
88	il est malheureux	110	現在
89	Jan ne parla plus de l'Arlésienne,	180	単純過去
90	il l'aimait toujours cependant,	170	半過去
91	on la lui avait montrée dans les bras d'un autre.	160	大過去
92	il était trop fier pour rien dire;	170	半過去
93	c'est ce qui	110	現在
94	ce qui le tua	180	単純過去
95	il passait des journées entières seul dans un coin,	170	半過去
96	il se mettait à la terre avec rage	170	半過去
97	(il) abattait à lui seul le travail de dix journaliers...	170	半過去
98	il prenait la route d'Arles	170	半過去
99	marchait	170	半過去
100	ce qu'il vit monter	200	接続法
101	il revenait.	170	半過去
102	il n'allait plus loin.	180	単純過去
103	les gens du mas ne savaient plus que faire.	170	半過去
104	on redoutait un malheur...	170	半過去
105	(sa mère) lui dit:	180	単純過去
106	Eh bien, écoute	90	命令法
107	tu la veux tout de même,	110	現在
108	nous te la donnerons	120	単純未来

図6「アルルの女」時制分布表4

番号	テクスト抜粋	コード	時制
109	le père/.../baissait la tête...	170	半過去
110	Jan fis signe que non,	180	単純過去
111	il sortit...	180	単純過去
112	il changea sa façon de vivre,	180	単純過去
113	on le revit au bal,	180	単純過去
114	c'est lui qui	110	現在
115	lui qui mena la farandole.	180	単純過去
116	le père disait:	170	半過去
117	il est gueri	110	現在
118	la mère, elle, avait toujours des craintes	170	半過去
119	(la mère) surveillait son enfant...	170	半過去
120	Jan couchait avec Cadet,	170	半過去
121	la pauvre vieille se fit dresser un lit	180	単純過去
122	les magnans pouvaient avoir besoin d'elle	170	半過去
123	Vint la fête de saint Eloi,	180	単純過去
124	il y eut du chateauneuf pour tout le monde	180	単純過去
125	comme s'il en pleuvait.	170	半過去
126	Vive saint Eloi!	200	接続法
127	on farandola à mort	180	単純過去
128	Cadet brûla sa blouse neuve...	180	単純過去
129	Jan lui-même avait l'air content;	170	半過去
130	il voulut faire danser sa mère;	180	単純過去
131	la pauvre femme en pleurait de bonheur.	170	半過去
132	on alla se coucher.	180	単純過去
133	tout le monde avait besoin de dormir...	170	半過去
134	Jan ne dormit pas, lui.	180	単純過去
135	Cadet a raconté depuis que	100	複合過去
136	il avait sangloté...	160	大過去
137	je vous réponds	110	現在
138	il était bien mordu	170	半過去
139	la mère entendit quelqu'un traverser sa chambre	180	単純過去
140	elle eut comme un pressentiment:	180	単純過去
141	c'est toi?	110	現在
142	Jan ne répond pas;	110	現在
143	il est déjà dans l'escalier	110	現在
144	la mère se lève:	110	現在
145	où vas-tu?	110	現在

図6「アルルの女」時制分布表5

番号	テクスト抜粋	コード	時制
145	où vas-tu?	110	現在
146	il monte au grenier;	110	現在
147	elle monte derrière lui;	110	現在
148	il ferme la porte	110	現在
149	(il) tire le verrou.	110	現在
150	réponds-moi	90	命令法
151	que vas-tu faire?	110	現在
152	ses vieilles mains qui tremblent,	110	現在
153	elle cherche le loquet...	110	現在
154	une fenêtre qui s'ouvre	110	現在
155	c'est tout...	110	現在
156	Il s'était dit, le pauvre enfant:	160	大過去
157	je l'aime trop...	110	現在
158	je m'en vais...	110	現在
159	Ah! Misérables coeurs que nous sommes!	110	現在
160	c'est un peu fort pourtant que	200	接続法
161	le mépris ne puisse pas tuer l'amour	110	現在
162	les gens de village se demandèrent	180	単純過去
163	qui pouvait crier ainsi, là-bas,	170	半過去
164	c'était, dans la cour,	170	半過去
165	la mère toute nue qui se lamentait,	170	半過去

図7 「アルルの女」時制分布分析図

